

『笛の日本文化』

LIBRARY ICHIKO 151 SUMMER 2021 7月31日 発売予定

竹笛、横笛を「篠笛」と呼んだのは五世福原百之助で昭和初期頃らしいが、定かなことはわからない。女竹から作られる、笛自体には節のない「篠笛」が一般に波及しており、近年、男竹から作られる笛に節が入っている「真笛」が少しずつ評判になってきている。他にも石笛、土笛からいろいろな笛が日本にはあるが、生身の竹で、身近で誰でも吹ける可能性のある篠笛・真笛に焦点をおいた。「真笛」は、蘭照さんと山口幹文さんが命名し作られた。

というのも、日本文化の原理である、〈非分離／述語制／場所／非自己〉を、それは完璧に領有しているからだ。笛は奏者があってこそ、その意味を作用させる、その息の吹き方・鳴らし方が非分離にならないと音が出ない、そして奏者によって、一本として同じものがないそれぞれが多彩な異なる音で奏でられる述語制にある、主体的・主語的では鳴らないし客観的にそれは演奏されない。そして、竹の産地によってまた音の色がかわり、場所の中で吹くと自然との非分離的な述語表出がなされる。笛に合わせ、非自己状態になることで自分らしい音を奏でられる。

子供のとき笛吹童子の映画を見て、笛のかっこよさを感じ、憧れをもったが、以来、祭りの時、どこかで演奏しているなぐらいで、笛に実際直面したことは一度もなかった。去年の春、たまたまテレビでふと見た篠笛の演奏に、自分はこれを吹きたかったのだという記憶が戻り、調べる限りを尽くして、たどり着いたのが、本誌に登場いただいた方達である。奏者もたくさんおられるが、狩野嘉宏さんと山口幹文さんが、誰しも認める究極の双壁であられる。それはいわゆる、歌舞伎、能、長唄など伝統芸能へ形式化された流派のものや祭りでは民衆によって奔放に奏されているものとは、まったく違う〈音〉の地平を開いておられる名人・達人であられる。

また笛を作られる笛師もあちこちにおられるが、伝説となって今やもう無い「朗童」管以後、横笛の聖地と篠笛愛好者から呼ばれている東金の蘭照さん、そして若手の真摯で気さくな次世代ホープの秀勝さんが、群を抜いておられる（製作過程を、公開可能な範囲で秀勝さんにご協力いただいた）。それは自分で吹いてみれば〈音〉の質感の卓越さとしてわかる。

日本文化の凝集体が、そこにはあるのを、わたしは自分の哲学そのものの具現体として、自分で奏しながら考え、遊び、楽しんでいるのだが、自らの知的資本と情緒資本のバランスが取れているインスタルメントであるのだ。三味線、琴、尺八、太鼓など、日本楽器は多々あるが、一番庶民的で身近に奏せる、たった一本のけなげな笛に、日本総体が凝縮されているのに、わたしは驚愕した。〈日本音階〉もまた、言語と同じように、明治近代以降侵蝕されてしまったが、これは根源から再考されて然るべき文化資本である。

▼笛師 蘭照 ▼真笛・篠笛奏者 山口幹文 ▼横笛奏者 狩野嘉宏 ▼笛師 秀勝 ▼山本哲士 眞笛・篠笛の〈音〉と日本音階と述語制表出の哲学 ▼浅利誠「述語制言語の日本語と」コブラ 【連載3】 ▼金谷武洋「話せる日本語(4)」 ▼カラー特集「篠笛・真笛」

「LIBRARY ICHIKO」は季刊誌です。次号は二〇二一年一〇月末発行予定



A5 変形 128頁 1650円 (本体+税10%)

【監修・アートディレクター】
河北秀也 (かわきた ひでや)
1947年生まれ。日本ペリエールアートセンター主宰。著書に『デザイン原論』など。本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】
山本哲士 (やまもと てつじ)
1948年生まれ。
政治社会学、ホスピタリティ環境学。
主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『くもの日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』、『フーコー国家論』ほか多数。

ご注文は「RICK」 → Fax. 03-3294-2177

文化科学高等研究院出版局 tel.03-3580-7784 fax.03-5730-6084

笛の日本文化

LIBRARY ICHIKO 151 SUMMER 2021 1950円 (税込)

ISBN 978-4-910131-13-9 C1010 ¥1500円

貴店名

部数

冊

文化科学高等研究院出版局

Email: ehesc@gol.com

ehescbook.com